

# 悪を断ち切る為の刀

水流

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ふと思い出す

人生において無くてはならなかった日々

現在、20歳になり仕事も家庭もかなり幸せ

あの時はこんな事になるだなんて思いもしなかったな

# 目次

人生において外せない日

1

風穴を開けます

10



# 人生において外せない日

「レキ」

寮の一室

俺、斎藤 雨月の部屋では今、正に悲劇が起きている

なんで、この女は毎日毎日俺の部屋に来るんだ

翡翠色の髪に金色の瞳

ヘッドホンを付けて武偵高の制服を着る女子

通称『ロボット・レキ』

彼女は俺の部屋に毎回毎回、やって来ると機械のように同じ動作を繰り返す

「お、お前はなんで俺の部屋に来てはエロ本とかを破っていくんだよ!？」

そう、何故かこの女は破っていく

AVとかは普通に割っていくからね、この女は

血も涙も無いとはこの事だ

「何度も申し上げたように貴方にそのような物は必要ありません」

「だからなんで？」

「これらの物が無くなつた代償行為は私をお使い下さい」「ごめん、それは普通に嫌だ」  
告白っぽいことをされてすぐに振る俺

この女は意外と男遊びに目がないのだろう

俺に毎回毎回、同じことを前から言ってくる

おそらくは誰かに依頼を受けており、そしてそれで俺を遊んでいるのだろう  
だが、俺はそんなことに引つかかるような奴じゃない

武偵高校2年生になる予定

普通に俺は来年辺りに転校するが、それまでは武偵をenjoyする  
背中に1本の日本刀を背負い、携帯を弄りながら話を聞く

「ごめんなさい、私はやっぱり諦めなくて・・・」

「何度も言うけど興味ないんだ。遊びで良ければ付き合っただけよ」

体育倉庫前に呼び出され、告白を断った

エロ本とかは買うけど実際には困ってはいない

俺は基本的に何故かモテるから

女に俺が興味がないだけで

いや、別に男に興味があるわけでは無いんだけど

「先輩・・・酷い！私がこんなに必死なのに！」

じゃあ、さっさと諦めて次の恋を探せ

そう言う前にさっさと走って行ってしまおう

はあ、本当になんでこんな女運がないのか自分でも不思議だ

乗ってきた自転車に跨がり、漕ぎ出した

その時に首の後ろにモソモソという何かが動いてる感覚

多少の擦ったさと柔らかさを感じた

「うーん、ビクトリー!!!」

小型の猫

愛らしい耳の片方が畳まれている灰色の猫

何故かこの生物に俺は好かれている

「おはよう、クロス。お前は相変わらずどこから出てくるんだ？」

後ろで背伸びするクロスにそう聞く

欠伸をしてから、すぐに頭の上に乗ってくるクロス

多少の重さを感じるがまあ、良いとしよう

「元氣一杯さ。僕は君が健康だと僕も健康。つまりは運命共同体だね♪」

若干、いやかなり話が噛み合っていない気がする

基本的に何故か、本当に何故か会話できるクロスの事を深く考えるのは辞めた産まれた時からずっと一緒にの為に余り違和感を感じない自分も無視している

『僕は君の事が大好きなんだ』『君が死んだら僕は死ぬ』『君は僕の全てさ』

この呪いのように俺に付き纏う言葉達

実際にクロスが離れない限り付き纏うのだが、余り好ましくない

特にこの『君が死んだら僕も死ぬ』

多分だけクロスが死ぬ事は無い

ただ、なんか罪悪感を感じさせる言葉

「前々から聞くけど、クロスってなんなの？」

「ずっと言ってるけど僕は君の精霊で守護者。わかる？」

額を痛くない程度の力でトントントンと叩くクロス

肉球の程良い弾力を感じる

それに対して俺は自転車を止めて一旦降りた

横断歩道は歩かないと駄目だからな

自転車を押して歩きだす

「それは“自称”だろ？本当はそうだな・・・厄病神とかじゃねえの？」



自転車に再び乗り出し、漕ぎ出す

「酷いなあ、僕はきちんと君を守ってるでしょ？」

「.....」

うぐつ.....！

なんも言えない

守られてるのは事実だけど今、頭の上でドヤ顔してるクロスに会いたくない  
尻尾を俺の前でチラつかせてくるし

「ねえ、雨月。今すぐさっきの倉庫に戻って」

「は？なんでだよ。戻ったら学校に遅刻するだろ？」

「そうだけど、今日は雨月の人生において外せないイベントが発生したんだよ」

俺の人生において外せないイベント

さり気なく尻尾で目の辺りを擦られるので、戻るか

Uターンを開始した後にはすぐ、黒煙があがった

「俺の人生において外せないイベントって俺が死ぬとかじゃないよな？」

「さあ？僕はわからないけどもしそうなら運命を変えるのは君だよ」

無責任な猫はハンドルに付いたベルの近くに降りてきた

というか、こいつは浮けるんだからずっと浮いとけば良いのに

第3者目線

自転車道を漕ぎ、体育倉庫前に着くと自転車から降りて自転車を止める

切れ長の長い目の割には大きな瞳

雪のような白銀の髪に混じる赤い髪

夕陽のように赤い瞳には「何も期待しない」そう言わんばかりの冷めた感情が見える

ベレッタM84FS

滑らかなラインを描くトリガーガードから緩やかに先へ細くなるダストカバーの曲

線美

弾道はやや不安定さはあるものの、ホップはしっかりとかかり飛んでいく

銃を懐から取り出し、体育倉庫に走って向かう

体育倉庫の中を見ると跳び箱が開いており、誰かが乱闘でもしたのかと思う程

「この痴漢！ 恩知らず！ アンタなんて助けなければ良かった！」

痴漢

そう大きなアニメ声が叫びだす

跳び箱の中で女の方が上になり下に男がいる状況

「ま、待て誤解だ!!」

不自然に床のコンクリートに触れる

男女の争いはどんどんヒートアップしていく

跳び箱を覗き込むと目を丸くする雨月

その視線の先には隣の部屋に住んでいる遠山 キンジがいた

「あれ、キンジ。お前、ついに犯罪を「違う!」

雨月は突如、体育倉庫の左奥へと跳んで逃げた

その様子に跳び箱の中の2人も異変を感じたがその異変の正体はすぐにわかる

—— ガガガガガガンツ!

突然、銃声が鳴り響いた体育倉庫

跳び箱や床にも何発か銃弾が当たっている

車輪が2つ並行に並んだ乗り物セグウェイ

その銃座から体育倉庫の中を見つめる銃口の数は15台

秒間10発の9ミリパラペラム弾を撃つ短機関銃サブマシンガン

「アンタ達も武偵でしょ!?!私だけじゃ火力負けする!」

そう言つて銃を持ち出した少女は跳び箱の中で必死に応戦している

徐に立ち上がり、背中に背負っていた刀を取り出した雨月

「ちよつ、アンタ退きなさい！一瞬で蜂の巣になるわよー」

刀の柄と鞘を持ち、胸の前で横に左右別方向に引いていく

ゆつくりと歩きながら、それでいて妙な殺気を纏いながら敵に近づいていく

#### 関孫六

4種類の異なる鉄を組み合わせた、折れにくく頑丈な刀

妖しく太陽の光によって青光りする刀は正に妖刀ともいえるだろう

「ごめんだけど……それは聞けない」

そう言うと一緒に駆け出した

銃口は一気に、雨月を狙い撃ちをするがその内の何体かは後ろへと戻って行く

左足を大きく後ろに引き、自身に飛んできた弾丸を全て刀で受け流す

次に、左足を大きく前に踏み出して流れるように銃口を落としていった

「全部で8台だけか……」

刀に付いた油を払うように振り払い鞘に収めた

後でちゃんと整備しよう

「バトンタッチだ、雨月」

キンジとハイタッチを交わし体育倉庫に入って行く

「了解。精々、お手柔らかにしてやれよ」

すれ違いざまにそう告げて跳び箱の中に居る少女を眺める

威嚇してくるので反応に困っているとどうやらキンジも始末を終えたようだった

「な、なんなのよアンタ達・・・！」

「第十六代目・新選組・斎藤 一の子孫だ」

## 風穴を開けます

「誰よ、その齋藤 一って?」

なんだ、この失礼な女は

抱いた第一印象は最悪と言った所か

こんな奴、助けなければよかった

跳び箱の中でなんかモジモジしてるけどあまり興味は無い

刀が錆びたりしたら困るし・・・さっさと行こう

くるりと扉の方を向きさっさと歩き出したが、クロスが見つからない

「クロス、さっさと行かないと学校に送れる」

そう言うのと、顔の前に来た

何やら微妙なニヤニヤを浮かべながらこちらをガン見してくる

「そうだね。だけど、もう遅刻してるようなもんだよ?」

そう言つて瞳に時計のような模様を浮き上がらせた

時刻は・・・12時30分

俺は7時30分には出てるんだぞ

この世界はどんな勢いで時間が進むんだよ

「絶対にその時刻は嘘だろ」

「うん、嘘だよ。僕の気分が12時30分だからそうしただけ」

悪戯が成功した子供のように笑い出す

本当になんだ、こいつは

外を眺めながら考える

何をどうやったたら今日の体育倉庫の件が人生に置いて必要な事なんだ

意味がいまいちまだわかっていない

因みにクロスは疲れたと言って部屋の中にある猫専用のベッドで寝ている

ピンポンピンポーン♪

隣の部屋から聞こえるチャイム

ベランダからでも聞こえてくる音なので、キンジも聞こえているはず

ピポピポピポピポピポピポピポピポーン！

流石に煩いので様子を見に玄関へと向かう

玄関の扉を開けると

「アタシが来たたら5秒以内に出ること！」

そんな不可能な

というか、その部屋はキンジの部屋

キンジはちよつとした病気を抱えているからなんとかしないと

そんな焦りからか刀を急いで取りに戻る

キンジの部屋の扉を開けた時

「アンタ、アタシの奴隷になりなさい！」

何してんだ、こいつらは

夕日をバツグにアリアが声高らかにキンジに命令している

あり得ん、実際に色んな奴に告白されたがこんな告白は見るの初めてだぞ

「うん、決まったわね」

何も見なかった事にしよう

そう心に決めてさっさと、玄関の方へと帰る

だが、その途中に背後から

「あ、アンタも居たのね。丁度いいわ。アンタもアタシの奴隷に「結構です」

ガチャツ

自分の部屋の扉をチェーンロックと鍵を3重にかけておく



腐つてもキンジされどもキンジ

油断大敵だ

キンジはヒステリアモードというもはや反則技を持っている

何やら難しい説明は省こう

簡単に言うとは性的興奮によつてキンジは力を解放する

そうなるも奴は女の命令に必ず従うようになるからな

ペランダの防弾ガラスの窓を閉め、防刃加工のカーテンを閉めた

一通りの身の安全を確保した所でやつと一息付く

はあ、俺はいつになつたら休めるんだ

狙撃科<sup>スナイプ</sup>の屋上

何故か急に知人に呼び出された

俺の部屋でも良いんじゃないかと聞いたがダメだとの事

なんだ、一体

刀を持つてくるような用事であるのか？

屋上の扉を開くと、フェンスに保たれるように体育座りして俺を待っていたレキを発

見

レキはこちらに気づくとヘッドホンを外して立ち上がった

「雨月さん、急にお呼び立てして申し訳ありません」

一歩、こちらへと近づいてくるレキ

対して気に留めはしないが、なんのようだろうか

「いや、別に良いけどなんのようだよ？」

再びまた一歩近づいてくる

俺の間合いの内側に入り出した

おかしいぞ、レキは何をしてるんだ

さっきまで間合いの遙か遠くに居たのに

いや、本当になんだ

流石に違和感を覚えてきて後ろに一歩退がる

「おい、近づくな。離れろ」

ブワッ

見計ったかのように突風が吹き荒れ、目にゴミが入った

思わず目を瞑った時

フワッとミントのような香りがした

唇に違和感が生じる

シリコンのように滑らかな感覚を唇に感じた

目を開くとレキの綺麗な顔が目の前にあり、実感している  
今、俺はレキとそのキスをしているのだと

レキの両肩を掴み、無理矢理自分から引き剥がす

「雨月さん、私と結婚をして下さい」

ここに居てはいけない

本能が警報を鳴らしているのでここは逃げるのが得策だろう  
逃げようと屋上の扉に手を伸ばすと――

チャキツ

もはや聴き慣れた銃を構える音

ドラグノフ狙撃銃

美しいまでに細身のデザインで他の狙撃銃を凌駕する軽量さ

悪環境でも故障しない信頼性・耐久性にも優れた世界を代表する名狙撃銃の1つだ  
「逃がしませんよ。もし逃げると言うのであれば風穴を開けます」

口元を押さえながら距離を取って聞く

レキは平然としており、何故か、異様な感じだ

クロスを家で寝かせておいてよかった

そう心の底から感じる

もし、こんなのをクロスが見てたら大騒ぎしてるだろうからな

「なんで結婚なんだ・・・別に実際とかでも良いんじゃないのか？」

「——そうすれば雨月さんもウルスになれますから」

「なんだ、そのウルスって」

「家族という意味です」

家族、か

嫌な日々を思い出した

話を切り替えよう

そうでないと気が滅入って了承してしまいそうだ

「レキ、言いたい事がある。俺と家族になりたいなら話し合いでいいだろう？なんで銃を

向ける必要があるんだ？」

単純な疑問をぶつける

どう考えてもおかしいだろ

ここは武偵だが、いくら武偵でも“養子縁組”を求める時に銃って

「銃を下ろせ」

冷静に交渉する為に先ずは銃を下させるべきだろう

レキも銃を下ろせば流石に自分のやってる事に気づくはず  
「お断りします。異性とは話し合いで手に入れる物ではなく」

レキは最小限の動きで再び銃口を俺に向けてきた

こいつ、婚約つて言ってるけど結婚つて怖いんだぞ

専業主婦とか外に出したくないと思つたら合法的に家に閉じ込められるからな  
それを考えると結婚なんてしたくない

「——奪う物ですから」

『ロボット・レキ』

そう言われる女子生徒は俺に銃を向けながら求婚してきた

生憎、俺はお前のことが好きじゃないんだ

「普通の男女は求婚する時は銃なんて持ち出さないし……つてかやり方を盛大に間違つてないか、お前」

ここは反論させてもらおう

だって、いきなり求婚された上に初めてのキスも取られた

その上に何故か銃を向けられているんだ

当然だが俺はここは反論する権利がある筈

「私もすぐに貴方と婚約出来るとは思っていません」「おい、人の話を聞けよ」

全く持って聞いて無いレキ

最早、結婚というゴールしか見えていないようだ

なんでこんな目に……

「ですので最大7分間……私は7回、貴方を襲います」

「貴方が私の銃弾に当たらなければ求婚は撤回します」

「たったの3分かよ!?!お前、実は最初から銃使うつもりだったんだな!?!」

「どこへ逃げてても構いませんよ。ですが私の絶対半径は2051mです」

こいつ、本当に人の話を聞かないな

レキはもつときちんとした奴だと思っただけだ

何かの命令を受信したロボットみたいだ

「つまり、2051m四方どこへ逃げてても私は貴方を射抜く事が出来る。この銃は私を

絶対に裏切りませんから」

どこからくるんだよその自信は

まあ、ここは武偵

求婚方式も多少違って……

いかん、これを認めそうになっているんだからな

つまりはレキと俺は戦わないといけない

「7回までに私と結婚してくださいね」

婚約からもう結婚が確定していやがる

もう、本当に俺はついていないようだな

「・・・7回で俺を諦めてくれよ」

そうレキに言い放つとレキは首を縦には振らなかつた

返事もしない

どうやら、負けるつもりもないようだ

確かにレキ相手だと難しいな